

宗像市内における須恵器脚付短頸壺の新出資料

太田 智 宗像市世界遺産課

要旨：須恵器脚付短頸壺は、これまでの研究で韓国嶺南地域南西部（特に小加耶周辺）が故地であること、分布が宗像・遠賀川流域に集中すること等が判明しており、今日では宗像地域の特徴の一つともされる。しかし当時は資料数も少ないうえ、分布の集中域とされた宗像地域の良好な出土例がほとんど公表されておらず、型式の設定などにも課題を残していた。そこで本稿では宗像市内の未公表資料のうち、完形復元できる6個体を紹介し、改めて検討を加えた。その結果、故地や分布域等はおおむね従来通りだったが、遠賀川流域と宗像地域では施文の種類と配置が異なる傾向があり、各々小地域色がみられるほか、加耶圏域のデザインを踏襲する系統とは別に、高坏形器台などの在地の長脚を組み合わせた系統も一定数存在することが明らかとなった。

キーワード：古墳時代、宗像地域、遠賀川流域、須恵器、脚付短頸壺、地域間交流

1. はじめに

脚付短頸壺は、宗像から遠賀川流域にかけて分布が集中し、6世紀後半に主に小加耶のものを祖形として創出させた器種とされる（牛嶋1998、寺井2012、太田2016）。今日ではその分布が地域間交流の範囲の一端を示すとされ、実際に成果が上がっている（太田・椎葉2020など）。

しかし、当時は検討できる資料が少なく、これが原因で型式学的検討も不十分と言わざるを得ないのが現状である。そこで今回は宗像市内の未公表資料のうち、完形復元可能な6個体を紹介し、改めて脚付短頸壺の検討を行う。

2. 資料の紹介

（1）野坂中松元31号墳（図1-1・5）

野坂中松元31号墳では2点出土する。このうち1は高さ18.6cm、最大幅5.9cmを測る。胴部下半は内面に当て具痕と外面にタタキ痕を残し、上半は回転ナデののち外面にカキメを巡らせる。肩部には刺突文を上下2段にわたって施す。5は破片だったが、接合した結果脚付短頸壺とわかった。1よりもやや大きく、高さ24.3cm、胴部最大幅19.5cmを測る。製作技法は1と同様だが、肩部の刺突文の様相や、脚部

中途に沈線を2条巡らせる点が1と異なる。

（2）久原Ⅲ-1号墳（図1-2）

2は口縁部が欠損するが、蓋の焼成痕跡から脚付短頸壺と判断した。全体的にカキメを巡らせる半面、施文等はみられない。

（3）久原Ⅳ-21号墳（図1-3）

3はほぼ完形で、高さ23.2cm、胴部最大幅20.7cmを測る。脚部下半の大きく屈曲しながら端部に至る形態が特徴的だが、製作技法はやはり1や5などと同じで、肩部には沈線で区画した上部に刺突文を、脚接合部付近と脚部下半に刺突文を巡らせる。

（4）平等寺原1号墳（図1-4）

4は復元すると高さ37cmとかなり大型で、脚部が異常に長い点で他とは一線を画す。脚部は沈線で区画したのち長方形透窓を三段にわたって施し、その間を刺突文がめぐる。肩部も沈線で区画した上部に刺突文を巡らせる。製作技法は他と同じである。

（5）大穂町原3号墳（図1-6）

6は歪みが激しい。高さ20.6cm、胴部最大幅19.8cmを測り、製作技法は他と同じだが、施文がなく、胴部は全体的にカキメが巡る。

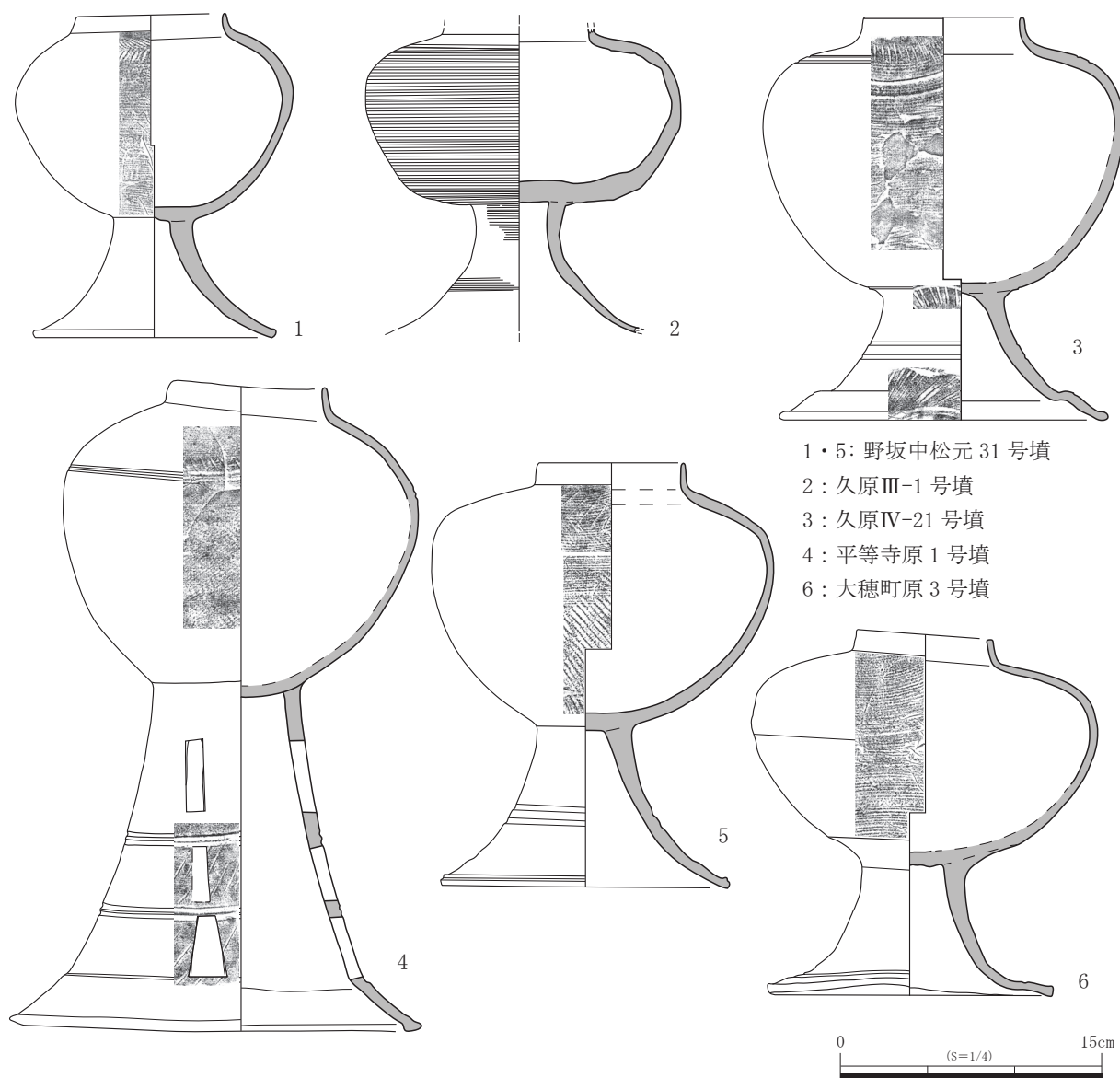


図1 宗像市内出土須恵器脚付短頸壺（新出資料）（S =1/4）

3. 脚付短頸壺の再検討

（1）先行研究

ここで一度既往の成果を確認しておく。まず牛嶋英俊氏は脚付短頸壺の基礎的な研究を進め、分布が宗像・遠賀川流域に偏り、ⅢB～Ⅴ期という比較的短期間に副葬品として使用されたことを指摘し（牛嶋1998）、寺井誠氏は小加耶周辺の土器が祖形となった可能性を指摘した（寺井2012）。筆者も朝鮮半島各地と日本の脚付短頸壺を比較検討し、寺井氏らと同様の結論に至った（太田2016）。しかし、型式の設定では分類基準があいまいな部分があり、施文や

製作技法等もあまり考慮されていなかった。具体的には変化に乏しく客観性が担保しにくい口縁部形態や胴部の形態を取り上げている反面、なぜか法量や施文の検討が行われていないなどの点である。資料数が少ない中で今回紹介した6個体は貴重である。これらを含めて改めて検討してみよう。

（2）各属性の分類と相関

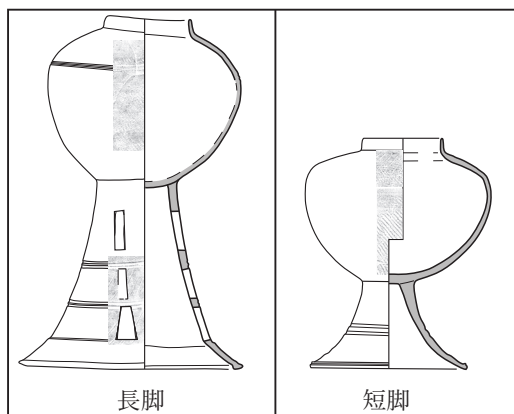
a. 分類（図2・表1）

まず全体的なプロポーシオンから短脚型と長脚型に分けておく。また最も差異が大きい脚部形態も湾曲するものとそうでないものに大別する。胴部は形

表1 脚付短頸壺一覧表

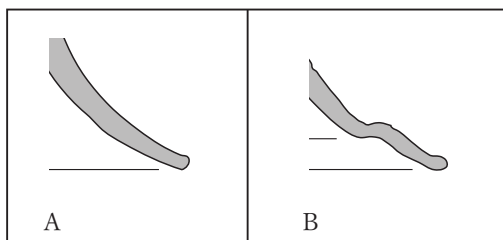
番号	所在地2	遺跡名	器高	脚高	胴部 最大幅	プロポ ーション	脚部 形態	施文 肩部	脚接合部	脚部	透窓
1	宗像市	平等寺向原Ⅱ-7号墳	23.8	6.4	21.8	短脚	A	刺突文2段	刺突文1段	無	無
2	宗像市	朝町竹重119号墳	—	—	—	短脚	B	刺突文2段	無	無	無
3	宗像市	大穂町原3号墳	20.6	7.1	19.8	短脚	B	無	無	無	無
4	宗像市	大穂町原1号墳	—	—	—	短脚	A	刺突文2段	無	無	無
5	宗像市	城ヶ谷3号墳	—	—	—	短脚	—	無	無	無	無
6	宗像市	城ヶ谷13号墳	—	—	—	短脚	—	無	無	無	—
7	宗像市	城ヶ谷18号墳	—	—	—	—	—	無	無	無	—
8	宗像市	平等寺原1号墳	37	20	20.4	長脚	A	刺突文1段	無	刺突文2	長3段
9	宗像市	久原Ⅲ-1号墳	18	—	—	短脚	—	無	無	無	無
10	宗像市	久原Ⅳ-21号墳	23	7.6	20.7	短脚	B	刺突文1段	刺突文1段	刺突文1	無
11	宗像市	野坂中松元31号墳	18.6	6.8	15.9	短脚	A	刺突文2段	無	無	無
12	宗像市	野坂中松元31号墳	24.3	9.2	19.5	短脚	A	刺突文2段	無	刺突文1	無
13	福津市	新原・奴山1号墳	24.8	9	21.8	短脚	B	—	刺突文2段	無	長1段
14	福津市	津丸横尾3号墳	20	6	8.6	短脚	A	無	無	無	長2段
15	福津市	手光南2号墳	—	—	—	短脚	—	刺突文2段	刺突文1段	刺突文1	長2段
16	福津市	手光南2号墳	—	—	28.6	—	—	刺突文2段	—	—	—
17	宮若市	都地遺跡 溝・土盛状遺構	23.6	8.4	18.6	短脚	A	刺突文2段	無	無	長1段
18	宮若市	高平1号墳	18.6	8.8	19	短脚	A	刺突文2段	無	無	無
19	鞍手町	古月C-5・D-2号横穴	19.6	5.2	19.8	短脚	A	刺突文2段	無	無	無
20	鞍手町	小牧西牟田B11号横穴	—	13.4	24	短脚	A	無	無	無	長1段
21	宮若市	向畑1号墳	—	—	24.2	長脚	—	無	無	無	有
22	宮若市	向畑2号墳	20.1	6.1	20.2	短脚	A	波状文3段	無	無	長1段
23	宮若市	小原7号墳	—	8	21.8	短脚	A	波状文3段	無	無	無
24	宮若市	損ヶ熊1号墳	30.8	8.8	18.6	短脚	B	刺突文1段	無	無	長2段
25	宮若市	小原1号墳	27.8	11.6	19.2	短脚	B	刺突文1段	無	無	長2段
26	宮若市	金丸西の浦古墳	20.6	6.2	20.4	短脚	A	刺突文4段	無	無	無
27	遠賀町	鳥見山遺跡群43Tr	21.5	7.4	7.2	短脚	A	無	無	無	無
28	岡垣町	東田8号墳	25	10	21	短脚	B	刺突文1段	無	無	長1段
29	岡垣町	縄手3号墳	—	—	19.2	短脚	B	刺突文1段	無	無	長1段
30	岡垣町	山田沖1号墳	24	10.5	19.2	短脚	A	無	無	無	無
31	岡垣町	高倉4号墳	25	12	17.1	短脚	A	—	—	—	長2段 円1段
32	岡垣町	菟ギ坂1号墳	25	7	21.4	短脚	A	無	無	無	三1段
33	大任町	狐塚Ⅰ-6横穴	—	33.2	25.8	長脚	A	波状文2段	無	波状文5 段以上	長1段 三1段
34	北九州	日明一本松塚古墳	23	8	20.4	短脚	B	刺突文3段	無	無	無
35	北九州	日明一本松塚古墳	19.2	6.6	18.4	短脚	A	刺突文1段	無	無	長2段
36	飯塚市	平原古墳	—	—	20.6	短脚	—	刺突文4段 波状文2段	無	無	—
37	飯塚市	小池14号横穴	22.6	8.8	19.6	短脚	B	波状文1段 刺突文2段	無	無	無
39	飯塚市	城腰5号横穴墓道A群	19	4.2	18.9	短脚	B	刺突文4段	—	—	無
38	飯塚市	西ノ浦上2号墳	—	—	—	長脚	—	—	—	波状文	三3段
40	嘉麻市	新行坊古墳	16.8	12	16	短脚	A	刺突文1段	無	無	長2段
41	桂川町	瀬戸5号墳	26.2	10.2	20.8	短脚	B	刺突文5段	無	無	無
42	宇美町	宇美観音浦KS1号墳	—	4.2	—	短脚	A	無	無	無	無
43	宇美町	宇美観音浦KS12号墳	20.8	7	19.8	短脚	B	刺突文3段	刺突文3段	無	無
44	福岡市	鋤崎A-5号墳	—	—	18.4	—	—	無	無	無	—
45	福岡市	高崎2号墳	20.6	6.6	12.2	短脚	A	無	無	無	無
46	福岡市	元岡G-1号墳	19.8	6.4	18.6	短脚	A	刺突文2段	無	無	無
47	福岡市	広石Ⅰ-1号墳	17	6.6	15	短脚	B	無	無	無	無
48	福岡市	堤ヶ浦7号墳	—	—	17.6	—	—	無	無	無	—
49	福岡市	堤ヶ浦10号墳	26.4	4.8	23.4	短脚	A	無	無	無	無
50	前原市	坂元1号墳	—	—	20.4	—	—	—	無	—	—
51	筑紫野	剣塚遺跡	24.6	9.8	21.6	短脚	B	無	無	無	三1段
52	八女市	釘崎3号墳	23.8	8.2	21.6	短脚	A	刺突文2段	無	無	無
53	久留米	内畑古墳	—	7	—	短脚	B	刺突文2段	無	無	無

※旧筑前～筑後まで対象



プロポーションの分類

図2 各属性の分類



脚部の形態

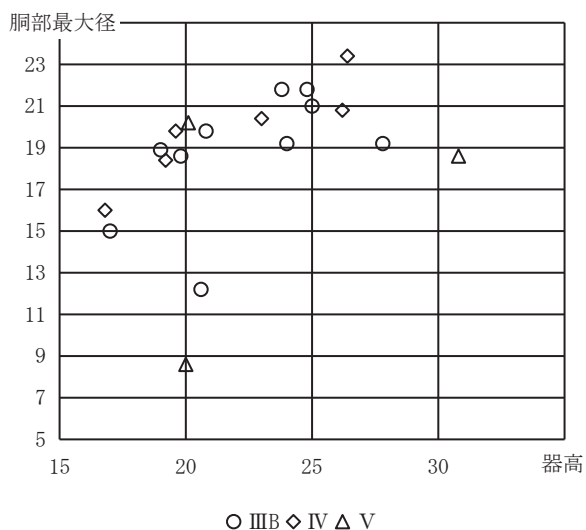


図3 器高と胴部最大幅、時期との関係

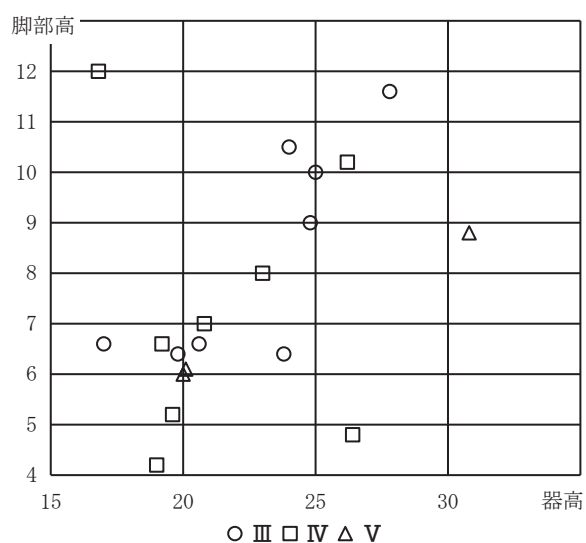


図5 胴部高と脚部高、時期との関係

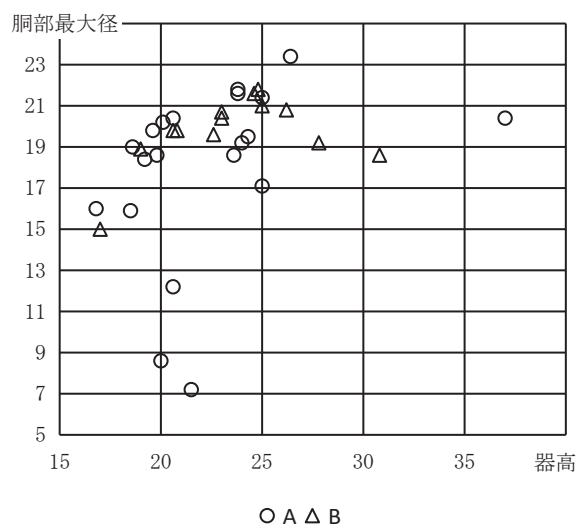


図4 器高と胴部最大幅、脚部形態との関係

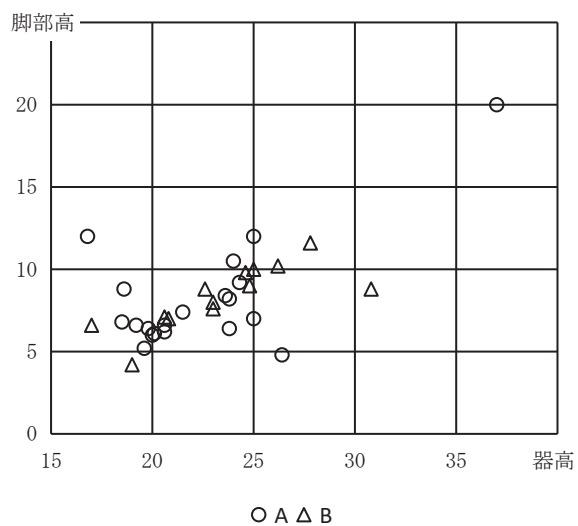
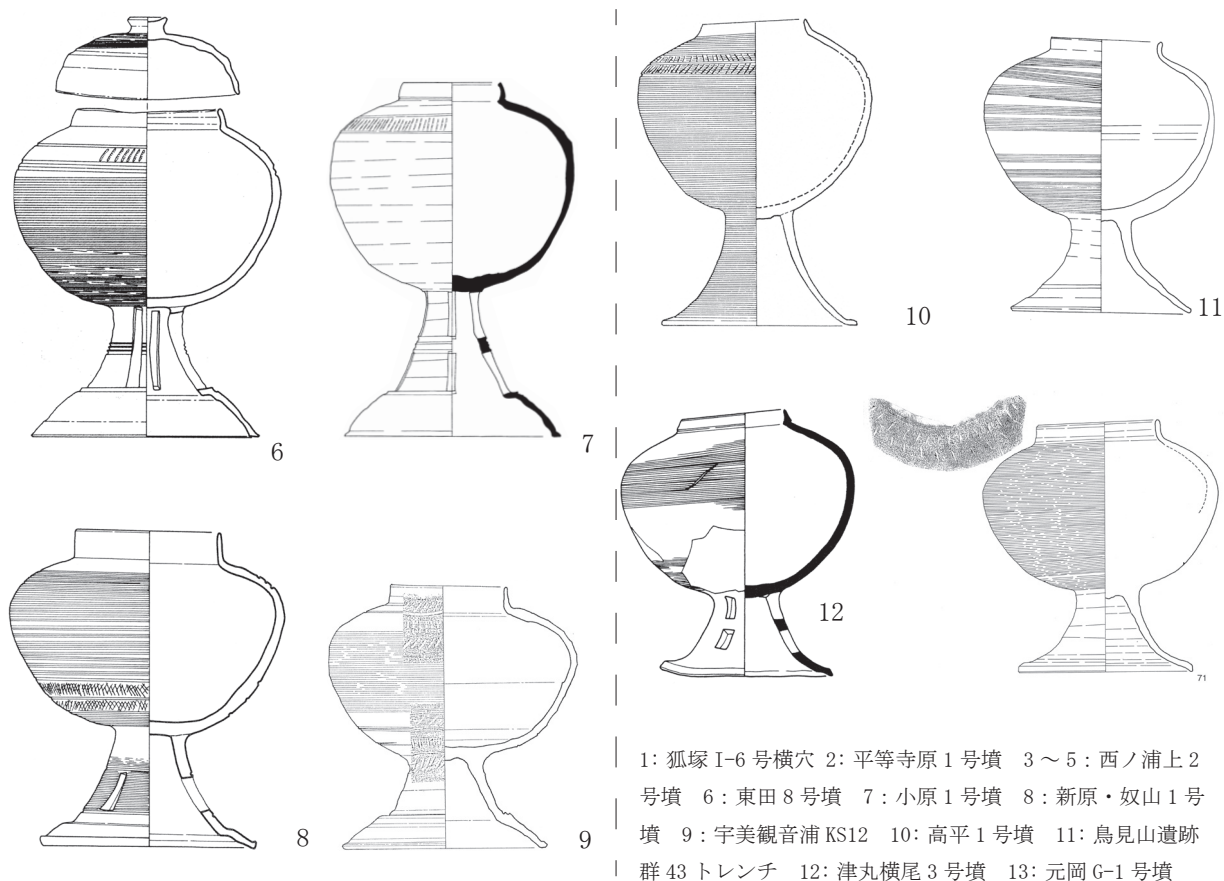
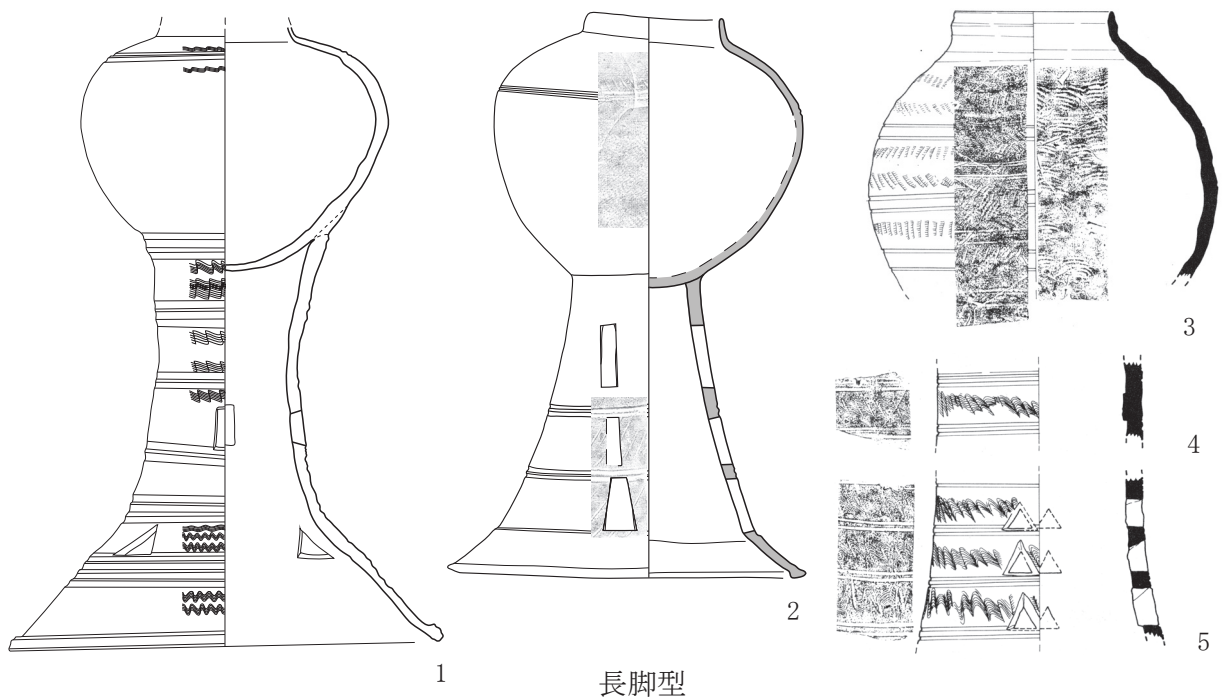


図6 胴部高と脚部高、脚部形態との関係

表2 脚部形態と時期

	III B	IV A	IV B	V
A	5	4	1	2
B	8	1	2	1



短脚型 B 類

短脚型 A 類

図 7 脚付短頸壺の諸例 (s=1/6)

態的な差異が最も小さく分類も難しいので、胴部最大径と器高・脚部高など各部の法量、全体のプロポーシオンから見極める。施文は基本的に刺突文と波状文の二種類が確認できる。施文の位置・配置等を表1のように表記した。

b. 各属性の相関

まず全体のプロポーシオンをみると(図3)、どの個体もやや縦長のプロポーシオンをもつ点で共通する。器高はおおむね20~30cm台におさまリ、そのプロポーシオンの縦横比もある程度共通する。しかし時期ごとの傾向をみると、各期とも分布範囲が重複しており、プロポーシオンの違いが時期差を表すわけではなさそうである。また、脚部との相関関係をみても(図4)、一見して明瞭に相関していない。

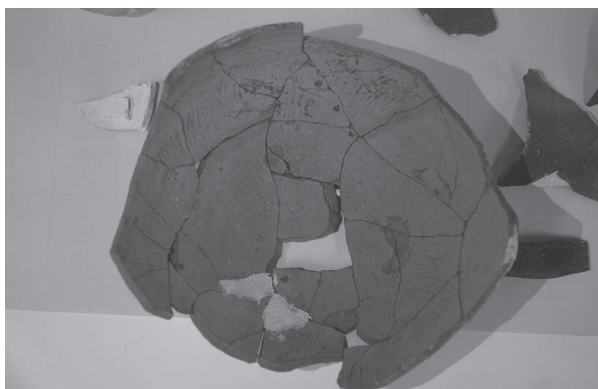
次に胴部高・脚部高と各属性の関係をみる(図5)。バラつきはあるものの、基本的には脚部高は胴部高の三分の一ほどしかない場合が多く、寸胴な印象を与え、先の胴部最大径とあわせてプロポーシオンにある程度のまとまりがある。しかしこれと時期の関

係をみると、図3と同じく時期差を示しておらず、これは図6の脚部形態の相関も同様である。一方、時期差を示す可能性があった脚端部形態も、表2に示すように各期ともに存続しており、単純な時間差というよりは、むしろ時期以外の系譜や工人の系統の差を示すとみられる。

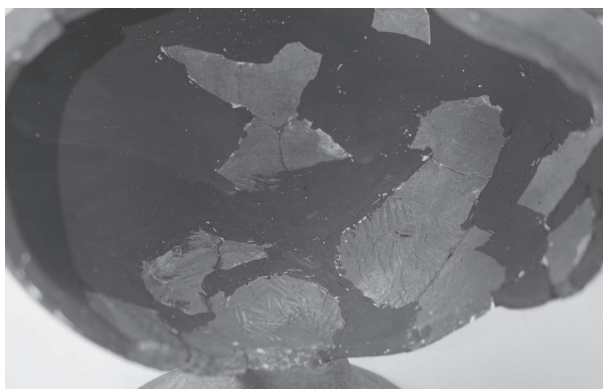
このように、脚付短頸壺は他の大量生産品と違い、各属性があまり相関せず型式変化に一定の傾向がみられず、分類も難しい。理由は後述するが、ここではおおまかに以下の通りに設定するにとどめておく。

(3) 各型式の設定と特徴(図7)

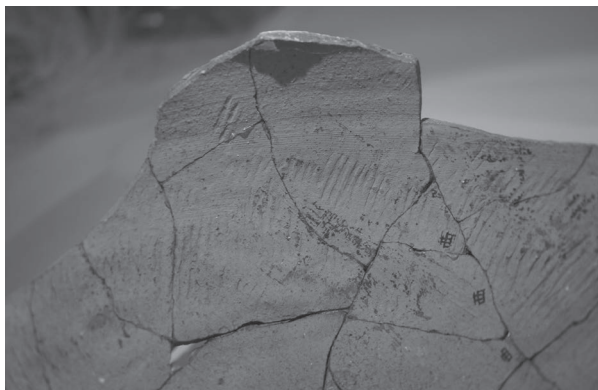
長脚型：胴部高よりもはるかに高い脚部が付くもの。脚部に透窓と施文を複数段巡らせる点では共通するが、各資料の法量はバラつきが大きいほか、施文・透窓の配置もさまざまである。現状では類例が少なく、完形復元できるものも今回報告した平等寺原1号墳例のみである。このうち西ノ浦上2号墳例



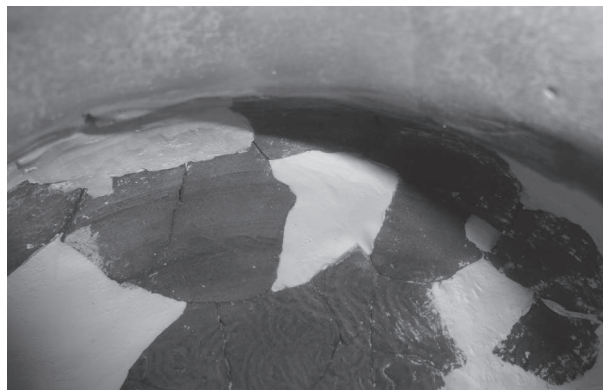
野坂中松元 31 号墳①



前畑古墳



野坂中松元 31 号墳②



菟ぎ坂 1 号墳

図8 脚付短頸壺の製作技法

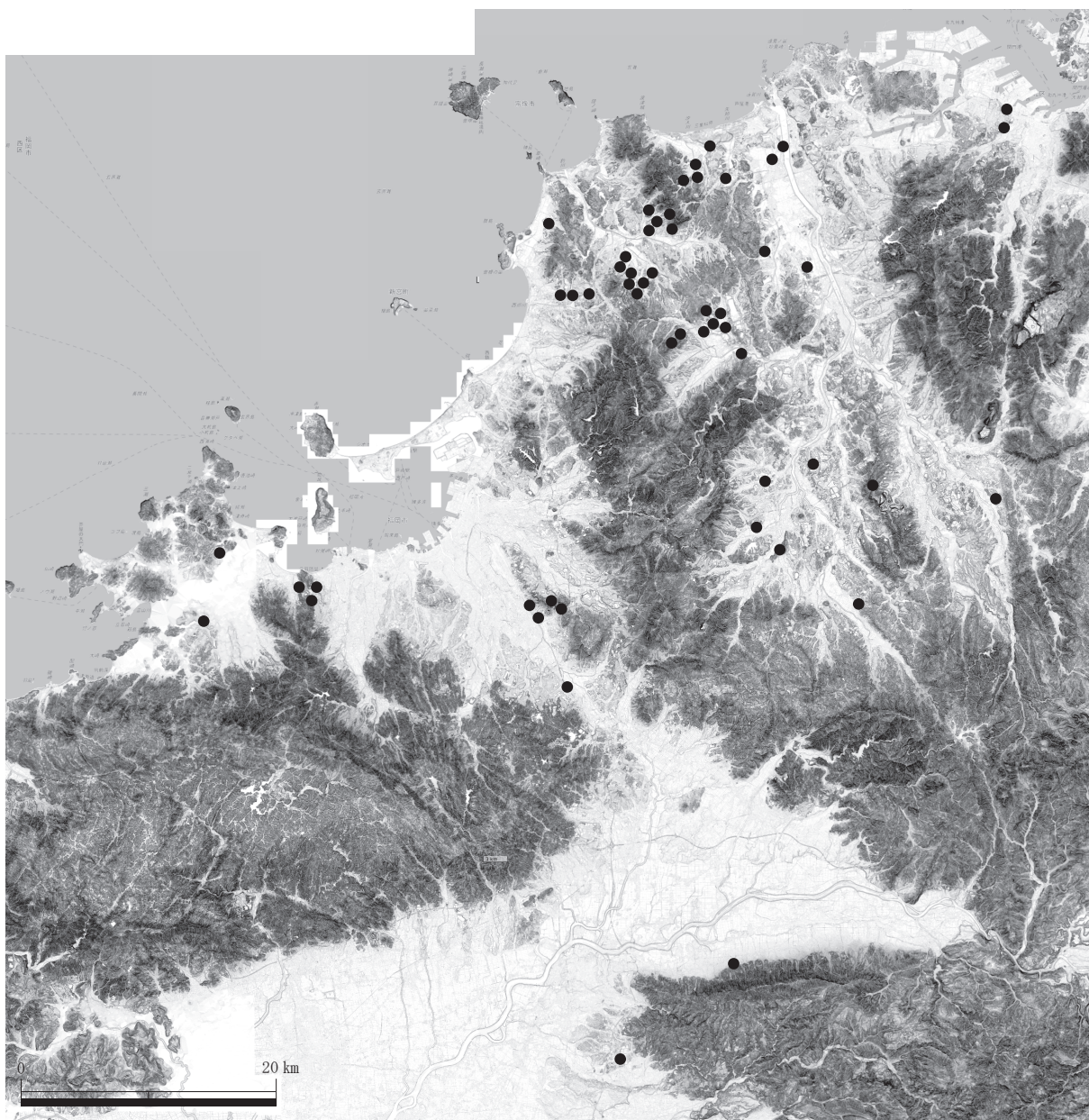


図9 脚付短頸壺の分布

はⅢB期だが、他は不明で、どこまで存続するかは分からない。

短脚型：胴部高よりも低い脚部が付くもので、脚部形態から2者に分かれる。

短脚型A類：脚端部までラップ状に開くものの一群。施文は有文と無文が混在しており、前者は刺突文が大半で、その配置は肩部1～2段が基本である。透窓もあるものとなないものが混在するが、特定の属性と相関するわけではない。

その出現は平等寺向原Ⅱ-7号墳等のⅢB期まで

さかのぼり、以後津丸横尾3号墳のV期ごろまで存続する。

短脚型B類：脚部途中で段を設けて湾曲させ端部に至るものの一群。施文は有文と無文が混在しており、前者は刺突文が大半で、その配置は肩部1～2段が基本である。透窓もあるものとなないものが混在するが、特定の属性と相関する傾向はない。

その出現は東田8号墳例等のⅢB期までさかのぼり、以後損ヶ熊1号墳のようなⅣB～V期ごろまで残る。古墳からの出土が主だが、装飾古墳の損ヶ

熊1号墳や日明一本松塚古墳のような首長墓から、朝町竹重119号墳のような一般的な古墳まで、階層を選ばず用いられる。

また、各型式の製作技法は共通しており、基本的にタタキ技法で成形し、上半部はカキメまたは回転ナデで整える(図8)。回転ナデを主とする通常の小型短頸壺とは製作技法が異なる。

一方、遠賀川流域では波状文を主体とする一群や、瀬戸5号墳、城腰5号横穴墓墓道、金丸西の浦古墳など4段以上施文する例が複数あり、これらの特徴は宗像地域ではみられない(図10)。少数で細分できないが、宗像・遠賀川流域には施文種類と配置で小地域差が存在する。

(4) 分布

図9で示した通り、やはり分布は宗像から遠賀川流域にかけて集中する。このうち宗像地域では城山から派生する丘陵一帯にまとまって分布する一群と、南部の一群のそれぞれでまとまりがみられる。前者は宗像窯跡群の「城山支群」に隣接しており(太田2023)、ここからの製品がもたらされているとみられる。一方、宮若市犬鳴川流域でも数がまとまっているのが注目され、宗像産製品の可能性のほか、未知の窯もあるかもしれない。

一方、遠賀川流域も数がそろいが、注目されるのが先述した施文の地域性である。このうち波状文を施す例は井出ヶ浦窯跡群の小型短頸壺にも多くみられるので井出ヶ浦産の脚付短頸壺が含まれる可能性が高い。

このほか、早良平野西部から糸島半島でもまとまりがみられる。一帯からは脚付短頸壺だけでなく脚付甕や垂耳状口縁甕、宗像系土師器高坏などもまとまり、移住を含む人的交流が古墳時代から行われていたことを傍証する(太田・椎葉2020など)。御笠川右岸の丘陵部でもまとまりがみられ、このうち堤ヶ浦6号墳から脚付甕が出土しており、こちらも彼我の地域間交流を示す資料として注目される。

(5) 脚付短頸壺の系譜

寺井2012、太田2016では小加耶の陶質土器を祖形

としており、本稿でも短脚型については、これを追認する。これは近年東田8号墳例の脚付短頸壺と共伴していた刻目釦が加耶南西部系であることが判明した点と矛盾がない(太田2022)。問題は長脚型で、ここまで長脚の資料群は朝鮮半島にはみられず、系譜がたどれない。ここで脚部に注目すると、沈線で区画する点やその間を透窓や施文で加飾する様相は高坏形器台や筒形器台、脚付の装飾付須恵器の様相と似ている。実際に西ノ浦上2号墳例では短頸壺と共伴して高坏形器台や装飾付須恵器などが多く出土したほか、宗像地域にも多い。このことから長脚型は小加耶のデザインに、在地の脚付器種の意匠を組み合わせることで創出した系統と考えられる。

4. まとめ

以上の検討結果を下記に示す。

①先行研究では宗像・遠賀川流域に偏在するとされつつ、宗像地域は資料数が少なく疑問符が付いていた。今回未報告資料を探索したところ、現状完形復元できるものが6点、今回紹介していないものも含めると相当数存在し、分布に関する先行研究の指摘が正しいことを追認できた。

②今回4型式に分類したが、いずれもⅢB期からV期まで同時併存しており、各属性等にも一定の時間的な傾向が見られない。

③施文のうち、宗像地域では基本的に肩部は刺突文1～2段構成が基本だが、遠賀川流域では波状文を巡らせる資料や、4段以上の例が複数存在し、一部は井出ヶ浦窯跡群産の可能性が高く、施文の種類や配置が小地域色を示すことが分かった。

④分布は従来通りだが、早良平野西部～糸島、御笠川流域の一部にまとまりがあり、これらは地域間交流の一端を示すとみられる。

⑤その系譜は、短脚型は従来の指摘通り小加耶である。ただし長脚型については朝鮮半島には見られない点、同時期の高坏形器台や脚付壺等と類似する点から、小加耶のデザインに在地の脚付器種を組み合わせることで創出させたものと考えられる。

なお、本稿作成に当たっては向井浩太・西依由里

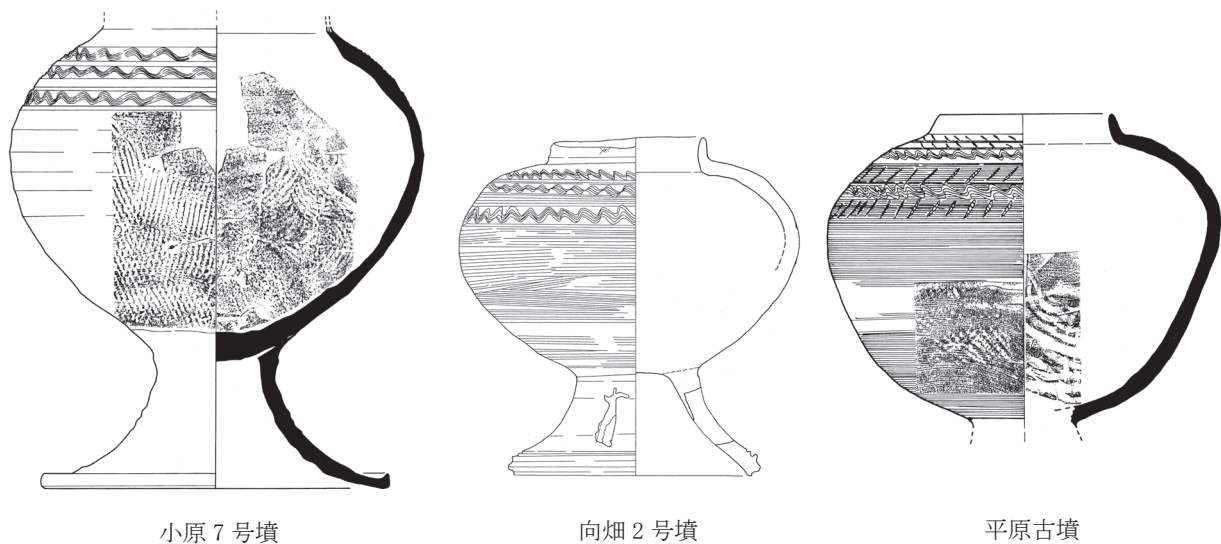


図 10 井出ヶ浦窯跡群周辺の脚付短頸壺 (S=1/4)

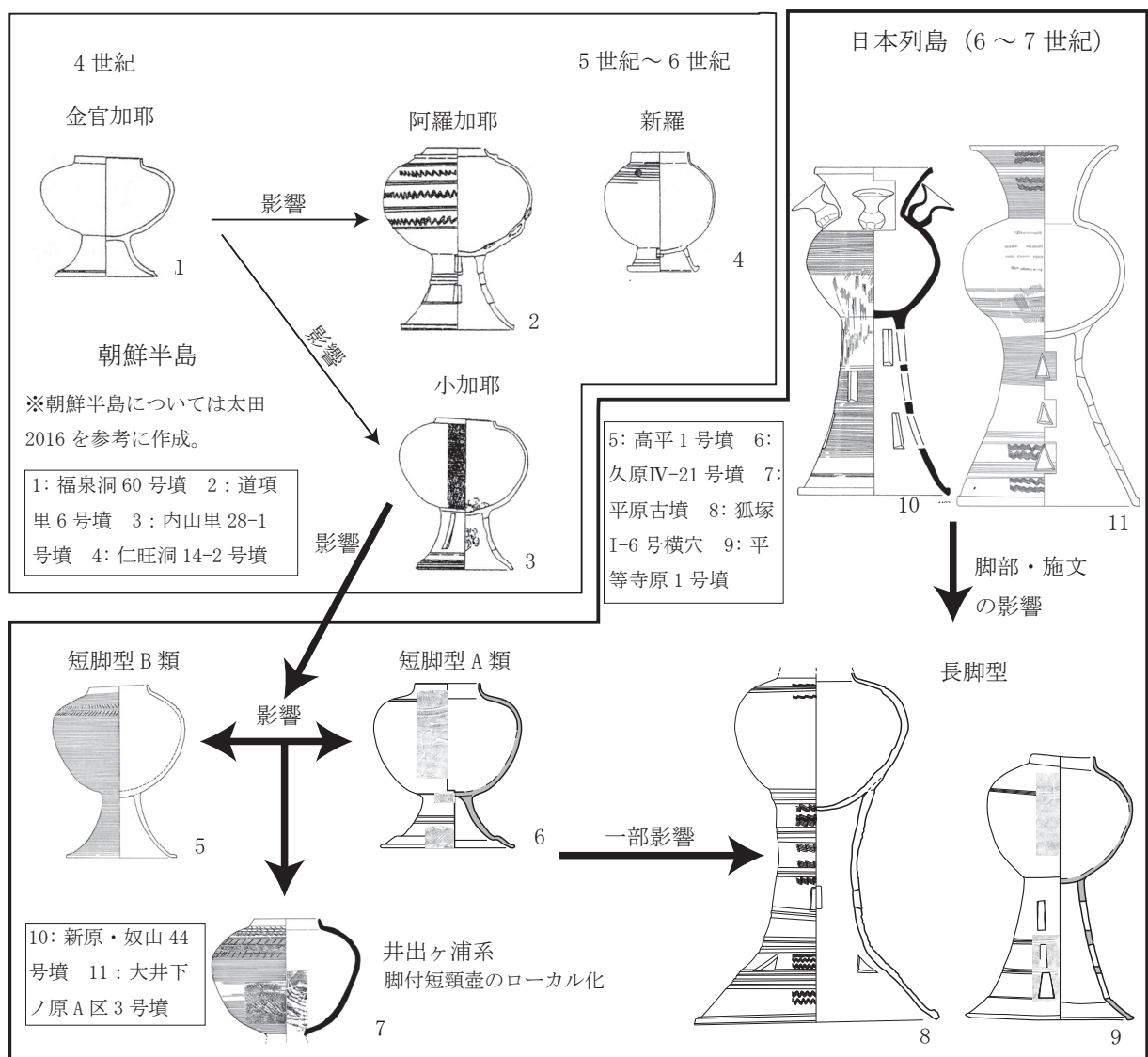


図 11 脚付短頸壺の軌跡 (縮尺任意)

香に資料の調査等で少しお手伝いいただいた。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 牛嶋英俊 1998 「大型脚付短頸壺について」『小原古墳群』若宮町文化財調査報告書第15集、若宮町教育委員会
- 太田 智 2016 「脚付短頸壺考」『七隈史学』第18号、七隈史学会
- 太田 智・椎葉 実郁 2020 「福岡市広石Ⅱ-2号墳出土須恵器の再検討」『七隈史学』第22号、七隈史学会
- 太田 智 2022 「三国・古墳時代の金属製刻目釦」『七隈史学』第24号、七隈史学会
- 太田 智 2023 「朝町木山遺跡・山田棒ノ尾遺跡・山田井ノ上遺跡の窯資料」『宗像市史研究』第6号、新修宗像市史編集委員会
- 寺井 誠 2012 「6・7世紀の北部九州出土朝鮮半島系土器と対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』、九州前方後円墳研究会

図版出典

- 図1-1・3・4・6、図7-2：筆者実測・拓本・トレース
- 図1-2・5：実測図を一部改変トレース 図2～図6：筆者作成 図7-1：大任町1976-1集を再トレース 図7-3～5：太郎丸遺跡調査会1987より転載 図7-6：岡垣町1976より転載 図7-7：若宮町1998-15集より転載 図7-8：津屋崎町1981-3集より転載 図7-9：宇美町1981より転載 図7-10：福岡県1979-若宮宮田1集より転載 図7-11：遠賀町2017-21集より転載 図7-12：福岡町1997-11集 図7-13：福岡市2019-1381集より転載 図8：筆者撮影 図9：国土地理院地図を基に筆者作成 図10-1：若宮町2003-19集より転載 図10-2：宮田町2005-6集より転載 図10-3：飯塚市2013-44集より転載 図11-1～4：太田2016から転載 図11-10：津屋崎町2003-20集より転載 図11-11：宗像市2018-75集より転載

本誌のデータは、本遺産群のデジタル・アーカイブ
「MUNAKATA ARCHIVES」の「宗像研究文献」より
閲覧・ダウンロードできます。
<https://www.munakata-archives.asia/>

沖ノ島研究 第12号

令和8(2026)年7月発行

発行：「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
(事務局：福岡県市町村・地域振興部文化局九博・世界遺産・文化施設課)
〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7番7号

ISBN 978-4-9913533-5-2